

## これからは先生の教育(教師教育、Teacher Education)を大学院でも

— OECD 諸国に負けない大学院での教師教育を—

開倫塾

塾長 林 明夫

### 1. はじめに

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

以前にも「学校の先生の教育をどのようにするか」というお話をさせていただきました。今、教育再生会議で「先生の教育をどのようにするか」が盛んに話題に上っていますので、本日は、「先生の教育」、つまり、教育関係者のことばですと、「教師教育(Teacher Education ティーチャー・エデュケーション)」についてお話いたします。

### 2. これからは先生の教育(教師教育、Teacher Education)を大学院でも

— OECD 諸国に負けない大学院での教師教育を—

- (1) 実は、今から 20 年ぐらい前までは、日本の先生の教育は最高の水準でした。なぜなら、世界の国々では先生の教育があまりうまくいっていませんでしたが、日本では戦後 20～30 年間は、大学を出た方、大学卒業者に小学校・中学校・高等学校の先生になっていただくということで、アメリカに次ぎ、世界に先がけて一所懸命それを実行しました。先生方も頑張り、非常にすばらしい成果が出ました。
- (2) その後、他の国々も日本やアメリカに追随し、大学で先生の教育をするようになり、大学卒業者が先生、教員になるようになりました。さらにその後は、日本では教育改革を行い、ゆとり教育に入っていました。一方、世界の国々では、国を豊かにし、国民生活を向上させるには教育が最重要ということに気づき、教育改革をスタート、その第一歩として、先生の教育やカリキュラムを整え、より多くの内容を教えることに重きを置くようになりました。日本は、ゆとり教育に走り、誰もがわかるように学習内容をなるべく少なくして、それをきちんと教えることにしました。その結果、今のような状態、つまり、大量の学力不足の子どもたちを生んでしまった状態になりました。先生の教育も従来通りに行われ、教育学部や教職課程の抜本的改革は戦後数十年はあまり行われませんでした。一方、世界の国々では、大学で先生の教育をしっかりとやり、それをどんどん加速させてももっともっとレベルアップさせることを、教育改革の大きな柱としました。
- (3) 最近では、世界の多くの国々では大学院で先生を目指す方の教育をしています。例えば、フィンランドでは、20 年前から小学校・中学校・高等学校の先生は大学院を卒業しないと入れないようです。アメリカの先生は 7 割の方が大学院を出ています。ドイツ・フランスでもほとんどすべての先生が大学院での教育を受けているというように、修士は持っていないけれども大学院で

の教育は受けているという人しか学校の先生になれないという状況です。多くの国では、一般の学校の先生が修士課程を修了し、校長先生は博士課程で学んでいる人が非常に増えています。国により違いはありますが、校長先生の多くは博士課程で学ぶ傾向にあります。

- (4) 一方、日本の学校の先生は大学院を出ている方が非常に少なく、修士課程で学んだ先生は小学校では全体の 1.4 %、中学校では 2.7 %、高等学校ですら 10.6 %に過ぎません。高等学校の先生でも約 1 割ですから、他の国に比べると先生のレベルが低い（低いと言っはいけないかもしれませんが）とさえ言えます。
- (5) 他の国では、教育改革の柱を「先生になる人を大学院で教育しよう」とし、先生という職業を高度な専門職と考えて、大学院での教育を受けさせるようにしています。そのため、先生の教育、教師教育(Teacher Education)に関しては、OECD（経済協力開発機構）に加盟している 30 か国の中で日本は一番遅れていると言われています。
- (6) そこで、遅ればせながら、日本政府にも、来年の 4 月から先生のための専門職大学院として「教職専門職大学院」を日本各地に作ろうという動きがあり、その準備が今盛んに行われています。では、どのような教職専門職大学院にしたらよいか。次の 3 つのことが考えられています。
- (7) 1 つは、先生としての教養教育です。先生に求められるのは豊かな教養ですので、先生になる方は教養のある人でないといけません。そこで、先生に求められる自然科学の教養、人文科学の教養、社会科学の教養と、3 つの分野の先生としての教養を深める教養教育が考えられています。
- (8) 2 つめは、専門職としての教育です。つまり、教職専門職教育です。まだ中身は明らかになっていませんが、私は次のように考えます。
- ① 私が一番大事だと思うのは、腹式呼吸を含む発声訓練です。これをボイス・トレーニングと言いますが、これはとても大事です。先生の中には発声あまり上手でない方もいらっしゃいます。いくら授業の中身がよくても、ちゃんとした発声ができないと、それを伝えることはできません。
  - ② また、美しい立ち居振る舞いの訓練も大事です。立ち居振る舞いが美しければ美しいほど、すばらしい授業が展開できます。
  - ③ それから、黒板の使い方、つまり板書の訓練も大事です。これについては、現行の教員養成課程の中では全くと言ってよいほど教えられていない大学が多いようです。教育実習では、板書の仕方なども教えてもらえますが、大学で教えられることはまずありません。しかし、ホワイト・ボードの用い方を含めて、板書の仕方を身に付けることは必要なことです。
  - ④ この他にも、時間配分をどのようにするか、児童・生徒を引き付けて勉強を好きにさせるためにはどうするかということも大事です。
  - ⑤ シラバスと言いますか、授業をどのように進めるかの概要を書く力も大事です。
  - ⑥ もちろん教科書はありますが、教科書以外のメイン教材を自分の力で作成する力も大切です。
  - ⑦ 検定教科書を使いこなす力。
  - ⑧ 副教材を作る力。
  - ⑨ 毎回行う確認テスト・小テストを作る力。市販されているものを使うのではなく、すべてのテストを自分で作成する力。
  - ⑩ 定期テスト・実力テストを執筆する力を身に付けることも大事です。教科書の指導書に載って

いるものをそのまま出題することは、力のない先生のすることです。今は、ほとんど出来上がっているものを切り貼りして使っている場合が多いですが、それではあまりにも先生としての力量が小さいと言わざるを得ません。

- ⑪一方的ではない、参加型の授業をどのように行うか。
- ⑫児童・生徒や保護者のカウンセリングをどのように行うか。
- ⑬進路指導をどのように行うか。
- ⑭クラスをどのようにしてまとめるかのクラス経営も大事です。
- ⑮学校行事をどのように運営するか。
- ⑯事務処理をどのようにするか。ワードやエクセルは先生としても必須です。
- ⑰会議や打ち合わせなどの職場でのコミュニケーションをどのようにとるか。
- ⑱特色ある学校や学年、クラスをどのようにして作るか。
- ⑲教員としてあるまじき行為、つまり不祥事をどのようにして防ぐか。
- ⑳危機管理。
- ㉑部活動の指導をどのようにするか。
- ㉒ PTA 活動や地域活動への参加をどのように推し進めるか。
- ㉓引率の仕方はどうあるべきか。

まだまだたくさんあります。このようなことをまとめて、教職専門職教育と言います。今後はこれらを考えていくわけです。

- (3)3 つめは、小学校から大学院まで、先生として教える教科の専門性を高めることが大事です。それには、教えるべき教科の内容を徹底的に頭の中に入れ、対象学年やレベルに応じた教育をきめ細かく行う能力を身に付けることです。これも、学校に行けば必要なことなのに、なぜか今までの日本の教員養成課程ではほとんど行われていなかったようですので、ぜひやっていただきたいと思います。

### 3. おわりに

- (1)これからは、世界の国々に負けないような形で、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の先生を目指す方の教育を大学院でしていただければと思います。
- (2)私も参加させていただいている「教師教育学会」では、先生のあるべき教育について調査・研究をしていますので、御関心のある方は入会をお勧めします。

— 2012年8月30日加筆・訂正 林明夫—